

フランス語における受動態について

松 田 孝 江

I. はじめに

受動態の現在時制と半過去時制の文の解釈について、それらが現在もしくは過去における未完了相か、あるいは完了相なのかははっきりしないことがある。峻別することは不可能なのか、可能ならばどのような条件のもとに可能となるのか、受動文の現在および半過去時制のアスペクトを中心に検討したい。

II. 態について

フランス語における態は、能動態・受動態・代名態に分類されている。能動態と受動態は、フランス語に限らず一般に、主語名詞が動作の行為者か受け手かによって区別される。他方代名態という名称の意味するところは、再帰代名詞を伴う態というにすぎない。代名態を能動と受動の流れに沿って命名するならば、両者の中間に位置する中動態 *voix moyenne* となる。しかしこの分類と命名は主として動作動詞 *verbe d'action* を念頭に置いたものであり、状態動詞に対しては適切とはいえないとして、これとは異なる解釈を説く文法家もいる。たとえば Moignet は動詞のアスペクトに注目して、能動を起動態 *voix opérative*、受動を結果態 *voix résultative*、中間に位置する代名態は *opérative* と *résultative* が統合された、総合態 *voix de synthèse* と定義した。¹⁾

III. 過去分詞と être について

受動態が本質的に結果を表す態であることに意義を唱える人はいない。Stéfanini によれば、それは受身の構成要素である過去分詞そのものの意味に基づいている。「愛される être aimé」は、時間軸上では「愛する aimer」の後に位置づけられる、という。²⁾ Stéfanini は受動を能動との関連のなかで捉えている。これを行為者と受け手の観点からいえば、行為者あつての受け手ということになる。それに対して Carlier は、＜結果態＞の起因するところを助動詞 être に求めている。³⁾ しかし être と過去分詞のどちらもが受動文の構成要素である以上、＜結果態＞は être + 過去分詞の連続が生み出すものとみるべきである。

受動態における過去分詞は、他動詞の過去分詞でなければならない。しかし動詞によって過去分詞が自動詞からのものか、他動詞からのものか判然としないものもある。

1 On a cassé l'assiette.

2 L'assiette a cassé.

3 L'assiette s'est cassée.

上例が示すように、動詞 *casser* には他動詞、自動詞、代名動詞が揃っている。したがって名詞 *l'assiette* を取り出して *l'assiette cassée* としたとき、この *cassée* は「割られた」のか「割れた」のか、どちらかを判別する術はない。Muller はこの種の動詞を *verbe neutre* と呼んでいる。⁴⁾ *cassé* が自動詞からのものか他動詞からのものか区別がつかなくなって、中立化することを *neutre* と呼ぶわけである。ところで「割れた」とした場合でも、代名動詞の過去分詞は、再帰代名詞を置き去りにして単独での形容詞的用法が可能なので、*assiette cassée* の *cassée* が例 2 の自動詞からのものか、例 3 の代名動詞からのものかは決めかねる。つまり中立化は代名動詞をもふくむ 3 種類の動詞を巻きこんでのものとなる。

自動詞・他動詞・代名動詞の有無は語彙によって異なる。たとえば結婚に関する動詞には、*marier qn à qn* (他動)、*se marier* (代動) があるが、離婚については *divorcer* (自動) のみである。

- 1 Elle a été mariée.
- 2 Elle s'est mariée.
- 3 Elle est mariée.
- 4 Elle a divorcé.
- 5 Elle est divorcée.

他動詞 *marier* の受身文について、例 1「結婚させられた」という完了相の文は可能であっても、例 3 を受身の現在と見ることはできない。ここでの過去分詞は例 5 におけると同様に主語の属性を示す形容詞になっている。このように“形容詞化された他動詞過去分詞”は、他動詞性からは解放されて、既婚か独身か、割れているか無傷かといった主辞の状態を描写している。

ところで Carlier によって、受身の<結果態>を担うとされた *être* は、多義的で過去分詞に劣らず複雑である。*être* は受身の助動詞であるとともに、一部の自動詞では複合過去の助動詞となることから、助動詞としては二つの異なる機能を持っている。単独動詞としては、主語と動詞を結ぶ繋合動詞になる。⁵⁾

- 1 Marie est frappée de stupeur.
- 2 Marie est sortie.
- 3 Marie est absente.

上例において、例 1 は *frapper* の受身、例 2 は *sortir* の複合過去、例 3 は *être* + 属詞と、統辞上それぞれ異質であるが、意味的には例 1 と例 2 における過去分詞は、ともに例 3 の属詞形容詞に近い。しかし少し変化を加えると、統辞上の違いが表面化する。

- 4 *Marie est frappée de stupeur hier.
- 5 Marie a été frappée de stupeur hier.
- 6 Marie est sortie hier.
- 7 *Marie a été sortie hier.
- 8 *Marie est absente hier.
- 9 Marie a été absente hier.

例 2 は、結果としての現在「外出した結果今不在だ」であり、例 6 の「昨日外出した」という、過去の事実の記述に転換可能である。しかし例 1 の、マリーが「茫然自失状態にいる」と例 3 の「欠席している」は、être に時制の変化を加えない限り、過去の内容表現に移行できない。複合過去は、過去の行為の結果としての“現在”と“過去”の行為を表すことから、例 2 と例 6 が可能になるのであるが、統辞上受身である例 1 には、そのような柔軟性は許されないのである。

IV. 動詞の内在的意味と受動文のアスペクト

動詞はその語彙的意味により、アスペクトに関して三種類に大別される。状態動詞と動作動詞、そして両者を併せ持つ、いわば状態動作動詞である。これらはアスペクトの名称で呼ぶならば、継続相、完了相、半継続相の動詞となる。たとえば状態動詞 *aimer*、状態動作動詞 *surveiller*、動作動詞 *manger* において、*aimer* のような感情動詞には限界がない。*surveiller* には出発点があって、その行為は終了時まで継続する。*manger* では行為が終了してしまえば対象物は姿を消し、動作は完了となる。

- 1 On aime Marie.
- 2 On surveille Marie.
- 3 On mange le biscuit.
- 4 Marie est aimée.
- 5 Marie est surveillée.
- 6 Le biscuit est mangé.

例 1～6 は、能動と受動の違いはあるものの、すべて現在時制の文である。しかし動作動詞 *manger* に限り、例 3 と例 6 はアスペクトに関して等価ではない。例 3 は「これから食べる」もしくは「食べている」に対して、例 6 では「食べられてしまった、その結果もうない」のである。前述のように Moignet は受動態を結果態と呼んだ。ここで態と時制・アスペクトの関係を見てみると、継続相または半継続相動詞では、同じ現在時制の能動文と受動文に差異は生じない。しかし完了動詞の *manger* では、同一時制でありながら態の変換にアスペクト変化が伴うことが避けられない。したがって Moignet のいう結果としての受動態は、「特に動作動詞にはっきり表れる」と言わねばならない。アスペクト変化を回避するには、あえて *Le biscuit est en train d'être mangé*. とするしかないであろう。複合過去ではどうか。

- 1 Marie a été aimée.
- 2 Marie a été surveillée.
- 3 Le biscuit a été mangé.

上例のように複合過去では、例 1、例 2 とともに「愛された」「見張られた」となって、終わりのある完了を意味する。例 3 も「食べられた」という動作そのものに重点が置かれている。半過去になるとどうか。

- 4 Marie était aimée.
- 5 Marie était surveillée.
- 6 Le biscuit était mangé.

半過去では、現在時制の文と同種のことが生じる。例4と例5は、過去における継続や、一定期間の継続を示すが、例6では完了した状態を表す。すなわち、「食べる行為そのものは終了していてビスケットは残っていなかった」となり、例6の能動文 *On mangeait le biscuit*. 「食べようとしていた」もしくは「食べていた」との間には、どちらも半過去でありながらアスペクト上のずれが生じる。

ところで受身が文レベルではなく、過去分詞のみが名詞に後置される形で表れると、今度は状態・状態動作動詞について曖昧さが生じる。

Marie aimée de tout le monde/Marie surveillée par la police において、aimée と surveillée は未完了相 (*Marie qui est aimée/surveillée*) と完了相 (*Marie qui a été aimée/surveillée*) の二つの異なる読みが可能である。一方 *le biscuit mangé* には完了相の解釈しかない。Gaetone はこれについて、つぎのような三種の例をあげている。⁶⁾

Dans cette optique, non retenue par A. Lemaréchal [. . .] (≡ *que ne retient pas/que n'a pas retenue*).

in *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* 1991, T.86 : 2

A. ルマレシャルに受けとめられていない/受けとめられなかったこの視点から見ると

retenir の過去分詞 *retenue* は、()内の二通りの読みが可能だという。しかしもし動詞が *choisir* で、*non choisie par* ~であったならば、完了相として、読みとりに曖昧さが生じる余地はないであろう。

Les indigènes de l'Est de l'Amérique sont les seuls qu'ont connus et fréquentés les Européens [. . .] (≡ *les seuls connus et fréquentés*).

R. Douville, J-D. Casanova 1967 : 8

アメリカ東部の原住民しかヨーロッパ人たちは知らなかったし、[彼らとしか] 交流しなかった。

上例において *seuls* 以下を()内に置き換えると、状態動詞 *connaître* と状態動作動詞 *fréquenter* は、現在を意味するのか完了過去を意味するのか不鮮明になる。

ところで過去の事柄の描写に使われる動作動詞は、受身の半過去になったとき、「過去の完了結果」に解釈されやすいことは先に見たとおりである。

Maintenant, j'étais tout seul . . .]. Un sentiment de mélancolie me gagnait, je languissais de revoir les frères et les parents (≡ *j'étais gagné par un sentiment de mélancolie*).

Ph. Labro 1986 : 134

私は今や一人ぼっちだった。メランコリックな感傷が私を襲いつつあって、私は親兄弟にまた会いたくてたまらなかった。

上例について Gaatone は、文体上からは（ ）内の受身の方がまとまりが良いが、あえて能動文が選ばれる理由として、受動文では、未完了の行為であっても結果としての完了相に解釈される懸念が生じるためとしている。⁶⁾ すなわち能動文では、「メランコリックな感傷が私を襲いつつあった」と進行形を含意するのに対し、受身は「襲われた状態にいた、襲われてしまっていた」と、完了相に解釈されるおそれがあるというのである。

受身と完了相の結びやすさは、文意によっては最適な効果を発揮するとして、Gaatone は以下の例をあげている。⁷⁾

Ma résolution est prise.

私の心は決まった。

La page est définitivement tournée.

ページはついにめくられた、ついに新たな段階に入った。

Dès qu'il a condamné Fouquet, en son for intérieur, son plan est fait.

P. Morand 1961 : 62

彼がフーケを非難した直後に、彼の内心では構想がまとまった。

上例はいずれも現在形でありながら、内容は“受身行為の完了”を表している。これらに共通していることは、動詞の語義がいずれも動作動詞であることである。

V. 動作主補語とアスペクト

Gaatone は動作主補語を持たない受身構文を“欠けた受身 passifs tronqués あるいは未完の受身 passifs inachevés”と呼んでいる。⁸⁾ “欠けた”や“未完”といったことばは、正規のものではないというニュアンスを感じさせるが実態はどうだろうか。動作主補語の有無については、Lamiroy (1993) が先行研究からの報告をあげていて、それによれば、動作主補語をまったく認めない言語が多くあるなかで、たとえそれが可能だとしても、ロマンス諸語にみられるように、受身文のうちの70～80%が動作主補語なしの受身文であることもある。また話しことばに限れば、98%が動作主補語なしの受身であるという研究もある。⁹⁾ つまり受身文の多くは動作主補語を伴わないのである。受身構文は、働きかけた力をば背後に追いやって、生じた変化のみを浮かび上げらせることに有効な表現といえる。

ところで受身文を観察すると、この動作主補語の有無が文全体のアスペクトとかかわりがある、とする説がある。

1 La maison est construite.

2 La maison est construite par un bon maçon.

3 La maison est construite en hâte.

4 ? La maison est construite par les maçons.

5 Les maisons sont construites par des maçons.

例1の動作動詞 construire の意味するところは、動作はすでに終了し、その結果「建設された家がある、家が建った」である。これについて Stéfanini は、完了した結果としての現在 présent parfait

を、真の現在 véritable présent にするためには、状況補語を加えればよいとして、例2「家は腕の良い石工によって建てられる」と例3「家は迅速に建てられる」をあげている。¹⁰⁾ 例1～例3における maison は、discours の中に現れた現実の、特定の家という読みが可能である。それに対し、「家」についての一般論として、文の主語に générique な意味を担わせるとどうなるか。Gaätone は例4「家は石工によって建てられる (ものだ)」には疑問符を付け、これを自然な文に変えたものとして例5をあげている。¹¹⁾ 例4について、インフォーマントによっては特に問題なしとする向きもあるが、例5のほうがより安定した文になるようである。例1～例5から、文意の決め手になるものは、主語名詞と、動作主補語や状況補語との相関関係であることがわかる。

6 La porte est fermée.

7 ? La porte est fermée par le gardien.

8 Les portes sont fermées par le gardien.

9 La porte est fermée tous les soirs par le gardien.

例6「扉は閉まっている」における fermée は、開閉という行為よりも、「開いてはいない」という扉の状態を描写していて、形容詞化している。Gaätone によれば、例7も例4と同様に不自然な文となる。¹¹⁾ これは例8の「扉は門番によって閉められるものだ」という一般論や、例9の「扉は毎晩門番によって閉められる」と、繰り返される行為にすれば安定した文になる。

ところで完了動詞の受身文における動作主補語の存在は、述部動詞を完了相ではなくて、未完了相に留め置く、すなわち未完了相に固定することには必ずしもつながらないとする主張もある。

1 Ces lettres sont écrites par des personnes différentes.

2 Ces lettres ont été écrites par des personnes différentes.

Muller は例1について、“ここにある手紙は執筆中 Ces lettres sont en cours d'écriture”という読みを決して排除するものではないと断った上で、例1の文意は例2に近いと説く。¹²⁾ 例1が現在進行中のできごとならば、主語名詞 Ces lettres と動作主 des personnes différentes は、同時にできごとにかかわっていることになる。しかし両者はともに複数名詞であり、特に動作主 des personnes différentes は、時間差のある複数のできごとを暗示する。そこで例2のように、「これらの手紙は何人もの異なる人物によって書かれた」という読みに傾くのであろう。例1については、文意が一般論を述べたものではないこと、行為者が複数であることが、例2と重なる解釈を可能にしている。

Muller は過去のことを述べた次の例1についても、この能動文を受動文にすると、例2の version adjectivale と例3の passif processif の読みがともに可能であるとしている。¹²⁾

1 Tant d'amis communs l'avaient prévenue contre moi.

2 Elle était prévenue contre moi par tant d'amis communs.

彼女は沢山の共通の友人によって、私に対する偏見を植えつけられていた。

(過去における状態)

3 Elle avait été prévenue contre moi par tant d'amis communs.

彼女は沢山の共通の友人によって、私への偏見を植えつけられた。

(過去における動作の完了)

例 1 は大過去の文であるから、時制上それに対応する受身文は例 3 であり、例 1 と、半過去構文の例 2 には、時制のずれがある。また例 2 の状態と例 3 の完了の相違は、動作主補語の有無によるわけではない。

Muller があげるつぎの例も、この違いを呈示している。¹²⁾

1 Tout était très bien arrangé par les maîtres de maison.

2 Les maîtres de maison avaient tout très bien arrangé.

家の主人たちは、すべてをうまく整えていた。

3 Les maîtres de maison arrangeaient tout très bien.

家の主人たちは、すべてをうまく整えつつあった。

Muller によれば例 1 は、例 3 ではなく例 2 を含意するという。すなわち例 1 は過去における、完了した結果としての状態であって、例 3 に見られるような、進行中で未完了の文意にはならないことになる。Muller の例には、行為者がいずれも複数という共通点がある。これらの例によって Muller は、受動文において、内容が現在のことであれ過去のことであれ、動作主補語の存在だけで未完了のアスペクトの解釈に絞るのは正しくないことを示したのである。

VI. おわりに

これまで受身文における動詞の時制と、意味内容のアスペクトとの関係を見てきた。その結果、時間軸上に固定されない、一般論的陳述はさておき、個々のできごとを表出するについては、とりわけ動作動詞の場合、受身文の時制がそのまま文全体のアスペクトと符合するとは限らず、未完了相と完了相との間で揺れがあることがわかった。受身文中に動作主補語が加わることは、動作の展開過程を描くことであって、そのことが受動文全体を未完了相に留めおくことになるという従来からの見方についても、Muller は動作主補語の存在が必ずしも未完了相につながらないことを、動作主補語名詞が複数である文によって指摘した。統計的には、動作主補語を伴うものは受身文全体の 2～3 割にすぎない、とされていることは前述のとおりである。こうした揺れは、受身の構成要素である助動詞 être と過去分詞のいずれもが、完了相にも未完了相にもなりうることに起因する。受身文におけるこうした揺れをどちらかに定めるのは、動詞を含む文の構成要素の相互関係や、前後の文脈であって、受身文そのものはこうした曖昧さを抱えていることに留意しなければならない。

(注)

1) Moignet (1981) p. 59 参照。なおバンヴェニスト (1983) は、「中動態は受動態よりも重要であり、受動態の方がこれから派生したもの」(p. 76), 「受動態は中動態に依存し、歴史的にはその一つの変形」(p. 171) としている。

2) Stéfanini (1992) p. 141.

3) Carlier (2002) p. 55.

4) Muller (2000) p. 62.

5) ドイツ語では、受身の助動詞 werden と繫合動詞 sein ははっきり区別されている。

6) Gaatone (1998) p. 229.

7) Gaatone op.cit., p. 230.

- 8) Gaatone op.cit., p. 17.
- 9) Lamiroy (1993) p. 56.
- 10) Stéfanini op.cit., p. 141.
- 11) Gaatone op.cit., p. 18.
- 12) Muller op.cit., p. 64-65.

(参考文献)

- Carlier, A. (2002) «Les propriétés aspectuelles du passif», *Temps et aspect: de la grammaire au lexique, Cahiers Chronos 10*, Amsterdam-New York, Rodopi B.V.
- Gaatone, D. (1998) *Le passif en français*, Paris-Bruxelles, Duculot.
- Lamiroy, B. (1993) «Pourquoi il y a deux passifs», *Langues 109*, p. 53-72.
- Moignet, G. (1981) *Systématique de la langue française*, Paris, Klincksieck.
- Muller, C. (2000) «Le passif processif et ses concurrents. Définition et quelques particularités», *Le passif* (Actes du colloque international, Institut d'Etudes Romanes, Université de Copenhague, du 5 au 7 mars 1998), *Etudes Romanes 45*, Copenhague, Museum Tusculanum Press.
- Stéfanini, J. (1992) *Linguistique et langue française*, textes réunis par P. Bonnefois, Paris, Editions du Centre National de la Recherche Scientifique.
- エミール・バンヴェニスト著, 川村正夫他訳 (1983) 『一般言語学の諸問題』みすず書房.